

TOHOKU EPO 通信

[エポ]

東北環境パートナーシップオフィス



vol.5



青森県大間町（写真：小岩勉）

contents

- 環境サミット in 小坂町
- 遠野での新しい自動車学校づくり
- 東北地方環境事務所からのお知らせ



環境サミット in 小坂町

環境月間である 6 月 6 日～7 日、7 月に北海道で洞爺湖サミットが開かれるちょうど 1 ヶ月前に、秋田県小坂町で「環境サミット in 小坂町～環境と文化の調和する循環型社会へ～」が開催されました。

- 日 時：2008年6月6日（金曜日）・7日（土曜日）
- 会 場：小坂町交流センター「セバーム」
- 主 催：環境サミット in 小坂町実行委員会
- 共 催：小坂町、秋田県、DOWA ホールディングス（株）、東日本旅客鉄道（株）、全日空空輸（株）

●プログラム

6月6日（金）

- 13:30 開会宣言 環境会議議長 石川好
挨拶 DOWA ホールディングス（株）代表取締役会長 吉川廣和
- 14:10 記念講演 「環境問題への取り組み方」東京農業大学教授 石弘之
- 15:30 分科会
 - ・廃棄物対策：コーディネーター 石川好（環境会議議長、作家）
 - ・環境教育：コーディネーター 山崎養世（山崎養世事務所代表）
 - ・環境行政：コーディネーター 宮家邦彦（AOI 外交政策研究所代表）
- 18:30 レセプション 挨拶 秋田県知事 寺田典城
祝辞 環境大臣 鴨下一郎

6月7日（土）

- 10:00 記念講演 「地球環境のいま」東京大学大学院教授 松井孝典
- 11:00 クロージングセレモニー
- 12:45 小坂製錬所見学

秋田県小坂町

小坂町は秋田県の北東部に位置し、十和田湖など豊かな自然に囲まれ、また江戸時代末期に銀が発見された鉱山の町です。今から 100 年前には、金・銀・銅の総生産額が日本一になったこともあるのだそうです。その後、平成 2 年に小坂鉱山は閉山となります。現在ではそれまでに蓄積された製錬技術を活かしたりサイクル事業が盛んな地域となっています。さらに、ゼロ・エミッション構想を基本としたエコタウン計画や、生ゴミの収集・堆肥化、菜の花資源の循環・バイオディーゼル燃料の利用など、様々な取り組みがなされているとのこと。今回の環境サミットは、このような日頃から循環型社会の実現を目指している小坂町で開催されました。



▲国重要文化財になっている小坂鉱山事務所



環境サミット in 小坂町の開催

サミットには、1 日目に 350 人、2 日間で延べ 650 人が参加しました。スーツ姿の人が多く見られる中、地元の高校生も参加しており、また全国からもたくさんの方が集いました。環境問題に対する関心の高さを感じられました。

石川好氏による開会宣言のあと、環境省の廃棄物・リサイクル対策部企画課の紀村英俊課長から、3R や低炭素社会、環境教育についてなど、循環基本計画のご説明がありました。資料を全て覚えておられる勢いに圧倒されながらも、非常に前向きな想いが伝わってきました。

次に DOWA ホールディングス（株）の会長吉川廣和氏からのご挨拶がありました。DOWA ホールディングス（株）は、前身である藤田組が明治政府から小坂製錬の払い下げを受け、経営に取り組んできた会社です。「循環型社会の構築を目指して」として、資源について様々なお話をありました。近年、中国で原料輸入が急増し、無資源国である日本と競合するようになり、資源が暴騰していることや、国策として自国資源を買い込む資源ナショナリズムについて、また非鉄金属業界では非鉄メジャーと呼ばれる主要 7 社における生産シェアが拡大・集中化していることなどを説明して下さいました。半導体産業や自動車産業に不可欠なレアメタルは、中国などに偏在しているのだそうです。そのような中で、小坂製錬ではこれまでに培ってきた有価金属の分離技術をいかし、金属リサイクルをしているということでした。廃棄された携帯電話や

家電製品は、その中に有用な資源を含んでいることから『都市鉱山』と呼ばれます。そういう意味では、日本は資源を輸入している一方で資源大国であるとも言え、リサイクルの技術は非常に重要なものです。携帯電話については、タイ、マレーシア、シンガポールでも集荷・輸入してリサイクルを行っているそうです。

記念講演

「環境問題への取り組み方」

東京農業大学教授の石弘之氏の記念講演では、「どうしたら地球環境を守ることができるか」について、環境問題の実態や側面、解決することの難しさを話されました。環境ブームというのは景気が良いと起り、今のブームで4回目ぐらいにあたるそうです。過去のオゾンホールやダイオキシンの問題などはどこへ行ってしまったのか、このブームもまたあっという間に消えていくものだと。ダイオキシンの問題にしても、主な原因は1970年までに撒いた異常な量の農薬で、実は焼却炉に起因するものは少ないというお話をありました。たしかに、思い返せば一時のブームで終わっています。例えば、暑い夏になると温暖化の記事が出るなどニュースの問題も指摘されました。

農業生産水準から、地球の限界は日本人的生活で61億人（2001年レベル）と言われているそうですが、これからアジアで人口が増え、2050年には90億人になると予想されています。世界では、8億人が飢餓状態にある一方、16億人が肥満であり、日本においては食料自給率が39%でありながら1/3が廃棄されているという現状もあります。人間には「飢えたくない」という願望があり、そして「自由に移動したい」という欲求から、車が急増しているというのです。CO₂を50%減らすとすれば1950年代の水準であり、生活水準は戻れない不可逆なものであることを指摘されました。また“合成の誤謬（ごひゆう）”という一人一人の便利や最善が、全体としてマイナスとなってしまうことも例として話されました。環境問題は文明を享受していることの副作用で、リスクです。では、どう改善していくのか。建前としては、エコファシズムとならない法的規制、飴とムチの政策的誘導、環境教育など倫理による自己抑制、そして技術開発や途上国援助などが

環境サミットin小坂町 講演の様子▶



あります。それでも日本のCO₂を6%削減することは非常に難しいことです。まずは、生活の30%は無駄であるから、それを減らすことはできるでしょうと言われました。しかし、車とエアコンを捨てなければ無理である、そのぐらい困難な問題だという認識が必要であることを強調されました。

夕方からのレセプションでは、鶴下一郎環境大臣が出席され、祝辞を述べられました。大臣が来られるということで、レセプション会場前には空港にあるようなボディチェックの機械が用意され、普段のイベントにはない空気に参加者のみなさんもちょっと驚いていました。もちろん、チェックをパスした後の会場の中では歌が披露されるなど、和やかな雰囲気に包まれていました。終了後には安全で環境面に配慮したという花火も打ち上げられました。

記念講演

「地球環境のいま」

東大大学院教授・松井孝典氏の記念講演では、温暖化問題を考える上で、よく聞く話とは少し異なる視点でのお話を聞くことができました。

地球温暖化の根拠となっているIPCCの難解な報告書を読んだという方は会場でもわずかでした。温室効果ガスによる温度への影響は地表の状況（感度）によって変わり、これを3次元モデルで解析するのは非常に複雑なものとなるそうです。しかし、何が起こるかという研究はしなければなりません。その一方、温暖化は国際的な政治の問題でもあります。冷戦という危機がなくなった後に動き出したものであり、国際政治には“危機”が必要という側面があるとのことです。各国皆それぞれの思惑があり、無邪気なものではないということです。

文明論的な意味合いとしては、昔は暑いと

きは頭が働かないことから避暑に行っていたものが、クーラーを使って仕事ができるようになったという、今の“こういう生き方”があります。地球の中（コア）と表面（大気と海）の相互作用である“地球システム”において、1万年前までは生物圏の1種であった人間が、生物圏外に新しく“人間圏”を作ってきたといいます。宇宙から地球を見たときに、夜半球が煌々と明るく見えます。地球学的人間論というものもあるそうです。

人間圏のいろいろな亂れが、地球環境問題です。18世紀ぐらいから急速に拡大したのは、農耕牧畜から化石燃料を使うようになり、駆動力を持ったことによります。また50年で人口が倍になるという、異常な時代でもあるのです。今1年生きることは、地球システムにおいては10万年分になるのだそうです。

この人間圏は、いわゆる地球上にやさしくないものです。実のところ、よく使う「地球上にやさしい」とはすなわち「人間圏にやさしい」ということになります。地球にとっては、温度が2°C上がってもなんともないことです。炭素同位体などによる推測では、1億年前はもっと気温が高かったと考えられています。650万年前の隕石の落下など、スケールの違う環境変動もありました。我々にとって、温暖化は国際的に食糧生産が変わってくることが問題となります。また、温室効果ガスでもっと重要なのは水蒸気です。地球の平均気温が15°Cに保たれているのは水蒸気のおかげであり、ないと-20°Cになってしまいますとのことです。水蒸気は地球上の30%が雲を作っているそうです。雲によって平均気温は変わるので、まだIPCCでも気象学的な数値は計算できていないのだそうです。地球にはまだわからないことが多い、人間圏だけの議論ではなく、地球システムをよく理解して考える必要があるということでした。

（分科会の報告…次ページへ）

第1分科会 「廃棄物対策」

2つのNPOと企業1社から発表がありました。持続可能な社会をつくる元気ネットの鬼沢さんからは、「市民が創る環境のまち“元気大賞”」で選ばれた、各地域での食品リサイクルや自然エネルギー利用などを紹介され、こういった事例の中間支援的な情報発信をしているとのことでした。中野・環境市民の会の三好さんは、エコクッキングやお祭りでのリユース食器の使用は呼び掛けば反応があること、町会での古紙回収の収入を基金化して環境にまわしていきたいというお話がありました。秋田ウッド(株)の三浦さんからは、木材とプラスチックの廃材を配合したペレットの紹介がありました。これらは再リサイクルして再度原料にできるということや、地域との連携では、学校でのペットボトルのキャップの回収および福祉施設にキャップのシール剥がしをお願いしているというお話をしました。

第2分科会 「環境教育」

4人の事例報告がありました。はじめに神倉さんから、若者向けに携帯電話を利用して環境問題に関心を持ってもらえるように、クイズ形式を用いた「エコトレ」の説明がありました。環境について楽しく知識を得ることができそうだと思ったのですが、その場の多くの参加者は携帯とはあまり縁のない世代だったようです。ESDの森さんは都市と農村の交流を、また山田さんはフロン回収を切り口にして、見学会やキャンプを通して環境にまつわる体験活動をしているそうです。最後に「森と風の学校」吉成さんからは遊びを通して学ぶ体験や地域住民と交流している取り組みのお話をありました。参加者からの質問は体験重視型に集中し、「環境教育とは何か?」を実践者から聞くことができました。

第3分科会 「環境行政」

各発表者が行政とNPOの取り組み事例を紹介しながら、連携の在り方などを探りました。東京都杉並区長の山田さんは、レジ袋有料化を推進する条例により、レジ袋の削減が図られていることを報告し、ゴミ減量には、住民の意識の変化が不可欠であることを話しました。NPO法人足尾に緑を育てる会の神山さんは、栃木県日光市での植樹活動について報告し、行政には植樹場所などの便宜を図ってもらい、植樹活動はNPOが主体となって行っていることを話しました。NPO法人水環境ネット東北の鎌田さんは、環境省と連携して行っている「東北環境パートナーシップオフィス」について報告し、十分なコミュニケーションとそれぞれの得意分野を活かした連携が必要と話しました。NPO法人環境あきた県民フォーラムの山本さんは、省エネ技術の最先端であるソーラーカーレースを報告しました。

会場の参加者からも活発な意見があり、行政、NPO、企業などさまざまな立場のみなさんが意見交換をしていました

●トピックス 「携帯電話のリサイクル」

金属のうち、鉄以外の金属のことを非鉄金属といいます。そのうち、もともと地球上に存在する量が少ないものや、分離・製鍊するのが難しいものを「レアメタル」と呼びます。リチウム、バナジウム、クロム、マンガン、コバルト、ニッケル、インジウム、ガリウムなどたくさんの種類があります。これらは他の金属と合わせることで、新しい性能や機能を持つ素材になるという特徴があります。そのため、家庭用品からハイテク分野など様々な領域で用いられています。身近な携帯電話にも金や銀、インジウム、ガリウムなどの貴重な金属が使われています。使い終わった携帯電話はリサイクルしないともったいないのです。



遠野市での新しい自動車学校づくり

株式会社 高田自動車学校
代表取締役 田村 満



■遠野ツーリズムの始まり

平成15年、遠野市にある自動車学校が、平成16年3月をもって閉校するという情報が私の耳に入った。岩手県内31校ある中で、1年間の入校生数は最も少なく、ついに来る時が来たか、という感じで受け留めていた。それと同時に、我が高田自動車学校に追い風が吹いてきたとも感じていた。何故なら、合宿教習を実施していたことと合わせて、もう少し集客に力を入れることが出来れば遠野市は商圈内になると思ったからである。

ところが、その後、遠野市の重鎮の人達が、何回となく来校するようになった。理由は、高田自動車学校の田村なら遠野自動車学校の経営を継続してくれるかもしれないということのようだった。私は、その都度、先方の事情や言い分を伺った後に、自動車学校業界のことや遠野市のデータを示し、遠野市においては、18才人口の減少をはじめとする経営環境の悪化が進んでおり、経営は困難を極めることを説明し、お引き取り願ったのである。しかも、遠野自動車学校をそのまま経営移譲させて頂くのではなく、別の場所に、新しい自動車学校を作ってもらいたいというのである。イニシャルコストもさることながら、オープンした後に経営を継続することの方がもっと大切であるし、とても私の能力では難しい話だと思っていた。

何回目かの話し合いの後に、遠野市役所の重鎮の1人が、「グリーンツーリズム」のことを話し始めたのである。

当時、私は、恥ずかしいことであるが、「グリーンツーリズム」については全く分からず、「何ですかそれは?」と尋ねたことを思い出す。彼は概要を説明し、遠野には年間で約200名の人達がグリーンツーリズムに訪れていることを私に教えてくれた。そして、合宿とグリーンツーリズムをコラボレート出来ないかを提案して來たのである。

彼らが帰った後、私はその言葉を真剣に考え悩むことになったのである。陸前高田ドライビングスクールと平泉ドライビングスクールにおいては、通常の合宿教習を行っており、ある程度の成果を残していた。しかし、このところの急激な少子化の影響により、この成果もあと10年続くかどうか疑問であった。長期的な展望に立った場合、これ以上同じような形態の教習所は不要で、悩む必要はなかったのであるが、「グリーンツーリズム(以下、遠野ツーリズムと呼ぶ)型の合宿教習」という違う形態であれば、もしかしたら過疎の地でも経営出来るかもしれないとも思ったからである。

また、通常の合宿教習校は、粗製濫造という風評がある。つまり、壊れやすい製品ばかり造るという喩えで、合宿教習校を卒業した人は事故率が高いと言われていたのである(実態は掴めないが)。

我が校の教育理念は「生徒さんの心の中に安全の小さな種を蒔こう。しかし、その種は丈夫で強い種でなければならない。」である。我が校の夢の一つは、卒業生の無事故率日本一であり、社員達に対しても厳しく戒めている。

そのため我が校の卒業生の事故率は決して高くはない。しかし、入校する合宿生は、「安全運転を身につけよう」と思っている人は殆どいない。「免許取れればいいや」と思っている人ばかりである。そのような人達に、「安全の大切さ」を説いても、2~3週間の短い期間で、心の中まで浸透させるのは難しい。しかし、もし、遠野ツーリズム型の合宿教習を選んで入校してくれる人達がいたとしたら、その人達は、少なくとも今の合宿生より「意識レベルの高い人達」なのではないだろうかと。「打てば響く」の喩えと同じように、その人達に「安全の大切さ」を説けば、我が校の卒業生の事故率が低下するのではないかと考えたのである。そして、これが成功すれば、全国の合宿教習校に一石を投じることが出来るし、それが日本の交通事故減少に繋がればとう、大それた考え方を持つようになったのである。

以上の様な夢が、私の中に膨らんで来て、最終的には自分の能力不足を顧みず引き受けることを決断してしまったのである。

(次ページへ)

■岩手県遠野市

北上高地の中南部

に位置し、四方を

山に囲まれた緑豊

かな市です。河童

や座敷童で有名で

「遠野民話」では、

全国的に知られて

います。



合宿教習の 経済効果について

平成16年3月30日にオープンした遠野ドライビングスクール（DS）は、合宿教習を導入するとしても、私の経営する陸前高田・平泉の両ドライビングスクール（DS）とは一線を画し、地域密着の戦略をとっている。合宿生達を宿泊させるための自前の施設は持たないつもりで現在に至っている。

ある会合の席上で、初対面の方に次のように言われたことを思い出す。「あなたの会社ほど遠野の地域に貢献している会社はないぞ。」と。その理由を尋ねると、「生徒が旅館や民宿やホテルに泊まることにより、朝と晩の食事が必要だが、その食材は、遠野市内の色々な業者から納入されているんだよ。その経済効果は大変なものだよ。」と答えてくれたのである。

これは、全国の合宿教習所も行っていることなので、それ程素晴らしいことは思っていないが、考えてみると、陸前高田 DS も平泉 DS もそうであるように、遠野 DS の合宿生達は、最低でも15日間～18日間は遠野に滞在し、当校は1日数千円の宿泊料を宿泊先に支払っている。仮に、1泊2食付きで1人 4,200 円で依頼したとしたら、約6万円～7万円の支払いになる。それに、昼食として弁当も用意しているので、1食500円として 8,000～9,000 円。合計で、約8万円の金額になる。また、彼らは、1日1回は必ずコンビニに買い物に行くし、もしかしたら、カラオケに行ったり、語り部の話を聞いたり、お土産だって買うかもしれない。タクシーも利用するかもしれない。

更に、NPO である「遠野 山・里・暮らしネットワーク」とタイアップして、農泊も含め、乗馬やそば打ち等の体験学習を実施しているが、この NPO にもコーディネート料として当校から支払われているので、これらを合計すると、合宿生 1 人が遠野市に落とすお金は 10 万円程になるのではないだろうか。

これは合宿生1人の金額であるが、1 年間で見ると昨年実績で約 350 名、合計金額約 3,500 万円が、遠野市に落ちた計算になる。大した金額ではないかも

しれないけれど、宿泊が伴わない観光やイベントに比べれば、地域の経済にとって遙かに有益な存在であることは確かなものではないだろうか。そして、NPO も含め我々の頑張り次第では、この数字を将来的に2倍や3倍にすることは充分可能である。現に、陸前高田 DS では毎年 1,000 名以上の合宿生を集めていることを見ても可能な数字であることが分かると思う。但し、そのように集客が出来たとしても、宿泊施設の受入が今後の課題になるであろう。何故なら、合宿生は春休みと夏休みの時だけに集中するので、収容人員が当校がお付き合い頂いている旅館・民宿・ホテル等の宿泊施設だけでは難しくなるからである。

NPO 主導で 様々な体験学習を実施

このプロジェクトには、NPO 「遠野・山・里・暮らしネットワーク」の力が欠かせない。合宿教習は、平成 17 年より本格的に始めたのであるが、合宿生の宿泊先の手配をはじめ、乗馬や農作業等の体験学習のお世話は、NPO が主導で行っている。また、今のところ、合宿生達は、遠野ツーリズムをしたいから我が校を選ぶ訳ではないので、彼らを体験学習に結びつける方策が必要であり、それを担当しているのも NPO である。NPO は、合宿生達が入校した際に、我が校の社員と一緒にオリエンテーションを行い、体験学習の説明をし、それに結びつける努力をしているのである。その結果、合宿生の 90%以上が何らかの体験学習をしている。ただ、残念なのは、その中で 3 泊 4 日の農泊体験は約 10%しかないことである。今後、これをどのような方法で増やすことが出来るのかが我々の課題であろう。

体験学習の種類は、乗馬・そば打ち・草木染め・わら細工・陶芸・農作業である。その中で、乗馬体験は単独で行っているが、草木染め・わら細工・陶芸については、そば打ちと複合させて行っている。

では、実際にどのような感じで実施しているかについて、全希望者のうち 60%以上もの希望がある乗馬体験から紹介してみたい。入校して 4～5 日後、

例えば、午前中は技能教習と学科教習を行い、昼食後、提携している「遠野・馬の里」に連れて行って乗馬体験を行う。1 人約 1 時間の体験だが、インストラクターが指導してくれるので、未経験者でも充分乗ることが出来るようになる。

乗馬体験において培われる能力には、生きる上で大変重要な要素であるコミュニケーション能力がある。つまり、馬を上手にコントロールするには、馬とのコミュニケーションが必要だからである。どうすれば自分が考えていることを馬に伝えることが出来るか、そして、馬が今どのようなことを感じているのかを察知する等といった能力である。これは、自動車を運転する時に必要な、自分と他者とのコミュニケーション能力と相通じるものがあると考えている。この能力が育って行けば、交通事故を起こしにくくなると思われるからである。

ただ、乗馬体験を終えた合宿生達が、短い時間の中でそのような実感を持つことは難しいであろう。しかし、次のような感想文を寄せた合宿生もいた。「最初は、馬に振り落とされるのではないかと不安でしたが・・・(中略)。馬のお腹を蹴つて歩かせたり、手綱を持って馬の進路を変えたり、止めたりしたのですが、非常に難しかったです。自動車は自分のハンドル操作に従って、その通り動きますが、馬は生き物なので、自分の思う通りに動いてくれません。・・・(後略)」

受け入れ先や 合宿生の反応について

宿泊先や体験学習に対する合宿生達の反応は、卒業式後のアンケートによって読み取ることが出来るが、それによると大変良い感じで推移している。例えば、宿泊施設に関するアンケートでは次のようなものがあった。「とても素敵な旅館でした。○○屋に泊まれて良かったと思います。赤ちゃん（6ヶ月）もいて、とてもかわいいかったし、いやされました。ご飯も美味しかったし、オーナーさんもとてもフレンドリーで、東京のストレスがなくなり、とても落ち着いた、いやしのある生活を送れました。」

「旅館の方々が、皆優しくて2週間とても居心地が良く暮らせました。また、一緒に宿泊した生徒さんと交流を持つてのような場を作ってください、ともにぎやかで楽しく過ごせました。」「馬に乗ったのははじめての経験でした。馬に乗ると目線が高く、最初は怖かったです。でも、指導員の人方が優しく教えてくれたので、乗れるようになりました。馬の背中の動きが伝わってきて、なんだか生きていることがわかりました。」「そば打ちと陶器作りをやりました。自分が打ったそばを食べるなんて、初めての経験でしたが、美味しかったです。たぶん、先生が親切に教えてくれたからだと思います。陶器はろくろを使わないでやりました。なかなか形が整わなかったのですが、何とかできました。もうもきれいに入れることができました。今度は、ろくろでやってみたいと思います。」

逆に、宿泊施設の人々からの反応です。「ほとんどの生徒さんは団体生活に適応できていると思いますが、本当に少ないけど、時間にルーズな生徒さんも見受けられます。気が付いた時には注意しております。これから先、仕事や結婚など、まだまだ楽しい人生が待っている若い子達です。私達の思いが少しでも通じてくれればと思っております。生徒さんとは短い期間のお付き合いですが、「我が子だったら」という気持ちで対応しているところもありますので、注意やアドバイスをして、楽しかったと思ってくれる時間を過ごさせたいと思っております。PS

この夏に、昨年卒業した生徒さん4名が、横浜から遊びに来ます。今から、特に、主人が楽しみにしています。」

我が社の経営理念は「邂逅に悦びを！！」である。ご存じの通り「邂逅」とは「出会い・めぐり会い」という意味である。全国数多い教習所の中で、何かの縁で当校に入校した合宿生達に対し、少しでも良い影響を与えることが出来るようにとの想いで当校の社員は接している。それと同様に、宿泊先の皆さんも、当校の理念を理解して接しているのである。



▲馬の世話を体験する合宿生



▲そば打ち体験をする合宿生

| これからの課題と展開について

これからの課題と展開について述べてみたい。今はこれらの体験学習の費用は、料金の中に含まれているが、もし、別料金だったとしたら、体験してくれるであろうかという疑問である。今のところはノーであろう。これまで乗馬体験やそば打ち体験を行った合宿生に他の体験を勧めても、実費がかかることを告げると、断られるというのが実態である。つまり、どんなに良い体験だったとしても、別料金で行うことは難しいという結論になってしまう。合宿生が体験したいと思うような厚みを持ったプログラムにしなければならないと感じている。

また、将来的に、我が校の横に馬場を作り、数頭の乗用馬を飼育し、合宿生の時間が空いた時にいつでも乗馬体験が出来るようにしたいと考えている。そうすることにより、乗馬体験をする機会が増え、前述した能力が育っていくような気がする。

現在、我が校は、無農薬による農業を手掛けている。自動車学校は、少子高齢化の波の中で、構造不況産業になっており、将来は赤字の教習所が多数増えることが予測される。我が社も例外ではない。地域にとって教習所ではなくてはならない存在であるが、累積赤字が続いているは廃業せざるを得ない。そこで、赤字を補填するものが必要であり、それが副業である。その副業を何にするかと考えた時に、私は教習所経営からキーワードを「教育」と「安全」に絞ったのである。そして、浮かび上がったのが農業である。農業は教育に通じるものがあるし、安全を考えると食の安

全もあると思い、無農薬栽培にこだわったのである。現在、遠野DSでは米、アイコ（トマトの品種）、アマランサス、シイタケ（原木栽培）、陸前高田 DSでは自根きゅうり（全国の99.9%は接ぎ木によるものだが）、アマランサスをいずれも無農薬で栽培している。

現在は3泊4日の農泊体験の合宿生は約10%であるが、将来的には限りなく100%に近いところまで持つて行きたい。農作物を育てるということはどういうことなのか、どんな気持ちで育てているのか、また、食の大切さ等々、農家の皆さんと一緒に作業をしたり、食事を共にしたりしている時の会話等、学ぶことが多い。農家の人々との交流は、合宿生達の人生にとって大変重要な体験になることは間違いない。

| ダーウィンの言葉を胸に秘めて

全国の有名な大企業の経営者を含め、我々がかつて経験したことのない急激な経営環境の変化が起こっている現在、これまでの経験則だけではこの難局を乗り切れないであろう。このことを、自戒を込めて、我々自動車学校の経営者は知る必要があろう。改めて、進化論で有名なダーウィンの言った「強いものが生き残ったのではない。環境に適応したものだけが生き残ったのだ。」という言葉を思い出す。

我が校の卒業生が、長い人生の中で、一生に二度と体験することのない遠野ツーリズム型の合宿教習を通じて、我が校のファンになり、遠野という町を好きになり、再び、この町を訪問して頂くことが出来れば大変嬉しく思う。

東北地方環境事務所

NEWS

環境問題普及啓発用パネルの展示と貸し出しについて（お知らせ）

環境省では、多くの方々に環境問題について改めて関心を高めていただくため、環境問題の普及啓発用パネル（B1・縦型・20枚セット）を作成し、東北地方環境事務所管内では網張及び宮古ビジターセンターで展示しております。また、これらのパネルは、環境省において展示利用していない期間は、民間団体、地方自治体等の主催する環境関係のイベント等での利用に際して、貸し出しを行っています。貸し出しが希望の場合は、下記の貸し出しにあたっての留意事項を確認の上、

お問い合わせ先に連絡して下さい。

[貸し出しにあたっての留意事項]

- (1) パネルについては、10枚を収納した箱単位での発送になります。
- (2) パネルの使用料は無償ですが、送料等については、全て主催者側でご負担いただきます。
- (3) 通常とは異なる利用等によってパネルを著しく破損した場合は、その補修費用をご請求させていただくことがあります。

【問い合わせ】東北地方環境事務所 国立公園・保全整備課 担当：太田 TEL:022-722-2874

化女沼の自然環境と野生生物について考える

宮城県大崎市にある「化女沼（けじよぬま）」。何から曰く因縁がありそうな名前のように、地元では娘と蛇にまつわる昔話があるようです。しかし、私たちにとって「化女沼」は、水鳥にとって重要な場所としてこの夏に指定される「国指定化女沼鳥獣保護区」であり、現在、この秋のラムサール条約湿地登録を目指して作業を進めています。

この僅か78ha（この内水面は34ha）の区域には毎年、絶滅が危惧されているヒシクイ（亜種）は2千羽以上、マガムは3千羽以上が訪れ、ガンカ

モ類をはじめとする渡り鳥の全国的にも重要な越冬地となっています。この他にもオジロワシ、オオワシなどの希少な猛禽類も見られ、これまで112種と数多くの鳥類が確認されています。

「化女沼」で昔話を想いながら、自然環境や野生動物について考えていただけたら幸いです。

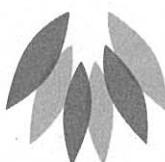
東北地方環境事務所野生生物課
文責：伊藤

つなぐ

今年の2月、岩手県遠野市の高田ドライビングスクールを訪ねNPOと連携した合宿型運転免許教習のことを伺った。教習所の誘致を何度も断り続けた田村氏が、グリーンツーリズムという言葉に心ひかれ、対象者人口が減少している遠野市への教習所の進出を決められたことと、また連携をしているNPO遠野山・里・暮らしがネットワークの菊池新一氏にもお話を聞いた。初めて聞くグリーンツーリズムのことを謙虚に受け入れ、それについて考え、未知の可能性に賭けるその柔軟な

思考と行動力の持ち主は？少し、ワクワクしながらも緊張して田村氏を訪ねた。「お待ちしていました。」と初対面の私たちを満面の笑みで迎えてくださり、楽しく取材をさせて頂きました。

6月に秋田県小坂町で開催された「環境サミットin小坂町」の環境行政分科会においては、東北環境パートナーシップオフィスの活動報告をしました。今後のEPO東北の「つなぐ」や「れんけい」の推進に向け、多くの皆様のエネルギーが頂戴できたように思えます。



EPO TOHOKU

東北環境パートナーシップオフィス
Environmental Partnership Office Tohoku

〒980-0014

宮城県仙台市青葉区本町二丁目5-1 オークビル5F

TEL.022-290-7179 FAX.022-290-7181

E-mail:info@epo-tohoku.jp

URL http://www.epo-tohoku.jp

勤務時間：月～金曜日 10:00～18:00

休日：土・日曜日及び祝日、年末年始